

太宰治の作品「人間失格」に関する新聞メディアの報道とその 意味 (2016)

Newspaper's Report of Dazai Osamu's Novel "Human Lost" and Its Meaning (2016)

劉 宇婷¹
Yuting LIU

¹同志社大学 社会学研究科 メディア学専攻 University of Doshisha

要旨・・・本研究は、太宰治の代表作「人間失格」がどのように報じられていたのか、その報じ方と報じられた内容が、どのような意味を持つのだろうかについての考察・分析である。まず、「人間失格」の暗い内容や世の中の流通する暗いイメージなどについての言説は「ネガティブな報道」、その逆は「ポジティブな報道」、どちらでもないものは「中立な報道」とする。「ポジティブ・ネガティブ・中立」なレベルで、報じ方を調査した結果、内容から見れば暗く、一部の読者にネガティブな作品と受けとめられる「人間失格」であり、そして世の中の流通するイメージも暗いのが多い「人間失格」であるが、しかしそうした側面があまり語られず、稀薄に印象付けられてしまう一方で、「人間失格」に関するポジティブな言説が、前面に出されており、強調されていることがわかった。また、テキストマイニングソフトを使い、「人間失格」と関連する語句を探索する方法で内容分析を行った結果も、①「太宰治」の「代表作」、日本「文学」の「名作」；②「漱石」の「こころ」と肩を並べる新潮「文庫」のロングセラー；③同感を覚えたり、生きる希望さえ見出したりする若者をひきつける「人間失格」というプラスイメージが指摘できた。このように、「朝日新聞」も「読売新聞」も読者が「人間失格」をポジティブに受け止めるような記事を工夫する理由は、新聞メディアが「読書文化」装置として機能しているためだと考えられる。

キーワード 太宰治, 人間失格, 内容分析, テキストマイニング, 読書文化装置

1. はじめに

作家である、故・太宰治は、1948年6月13日に愛人の山崎富栄と共に玉川上水に身を投げた。遺体が上がったのは6月19日である。すなわち、生身の太宰治は1948年6月19日にすでにこの世を去った。しかし、60年あまり経ち、2016年現在、われわれは<太宰治>という名を聞くことで、頭の中に何かしらのイメージや情報を思い描くことができる。それはなぜだろうか。太宰が作家であるため、後世に残された彼の作品を読み、一定の知識と情報を持つようになった可能性があると考えられる。たとえば、ネットエイジア株式会社の<「太宰治」に関する調査(太宰治生誕100周年記念調査)>によると、<太宰治>を知っているかという質問を単一回答形式で聞いたところ、「知っていて読んだことがある」と回答した人は全体の61.8%を占める。しかし一方、彼の作品を一つも読んだことなく、「太宰は〇〇」「〇〇太宰」と、口にした心の中に思い描いたりできる人もるように思われる。同調査から、「知っているが読んだことはない」と答えた人も34.9%いることがわかった。

ここで、遠い昭和時代に生きていた太宰治に関するわれわれの知識や情報は、どのように形成されたのだろうか。太宰の本を手に入れ、読んでみたら面白かった。そこで周囲の人々に口で伝えたりして、情報が広がったことは考えうるが、不特定多数の人人に対し、情報を大量生産し大量伝達するメディアの影響もまた無視できないだろうと思われる。

本研究は、主に太宰治没後の情報やイメージと新聞の関係について深く検討するものである。新聞を分析対象とした理由は、高い普及率、雑誌と違い、読者層を特定しない一般人向け、長期にわたる調査ができることなどがあげられる。新聞の中で、没後の太宰治に関する情報や知識がどのように、報道され、解説されるのだろうか、また新聞が<太宰治>を語ることは、どのような行為だったのかという関心のもと、太宰治の作品がどのように報じられてきたのか、その報じ方と報じられた内容が、どのような意味を持つのだろうかについての考察・分析である。具体的に、新聞メディアの太宰治の作品をめぐる言説に

着目し、〈有名性〉という文脈で捉えると同時に、なぜそのように当の作品を語ることが必要とされたのかについても究明したい。

2. 作品の選出と方法

2009年新潮文庫の太宰作品累計発行部数トップ1は「人間失格」であった。一方、「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」のデータベースを利用し、「太宰治 AND 代表作」をキーワードに、作品が太宰治の代表作として明言される回数を算出するという研究手法を取り、調査を行った結果も、表1の示すとおり、「人間失格」は1位であった。そこで、本研究は、「人間失格」を取り上げ、考察・分析した。分析方法に関して、「人間失格」の暗い内容や世の中の流通する暗いイメージなどについての報道は「ネガティブな報道」、その逆は「ポジティブな報道」、どちらでもないものは「中立な報道」とし、「ポジティブ・ネガティブ・中立」¹なレベルでの調査から、「人間失格」に関する「朝日新聞」と「読売新聞」の報じ方を探った。一方、「人間失格」に関する両紙の内容分析は、主にテキストマイニングソフトを使い、「人間失格」と関連する語句を探索する方法をとった。対象期間は、太宰没後から2014年12月31日までである。

表1 代表作として明言された太宰治の作品 読売新聞・朝日新聞・毎日新聞 単位：回

読売新聞		朝日新聞		毎日新聞	
作品	回数	作品	回数	作品	回数
人間失格	29	人間失格	33	人間失格	39
斜陽	20	斜陽	17	斜陽	24
津軽	13	津軽	7	走れメロス	11
走れメロス	9	走れメロス	4	津軽	6
ヴィヨンの妻	2	「晩年」「お伽草紙」 「桜桃」「富嶽百景」	1	ヴィヨンの妻	3
「逆行」「晩年」「トカ トントン」「グッドバイ」 「新ハムレット」 「富嶽百景」	1			「晩年」と「富嶽百景」	2
				「お伽草紙」「グッド・ バイ」	1

3. 「人間失格」に関する「朝日新聞」「読売新聞」の報じ方

(1) 全体的な傾向

両紙のデータベースを確認したところ、「朝日新聞」において、選別された太宰治の「人間失格」と関連のある記事が218件あった。「読売新聞」において、230件あった²。報道の量からみれば、両紙の「人間失格」関連記事の件数はあまり差がないが、しかし、初出からみれば、「読売新聞」が「朝日新聞」より、はるかに早く、「人間失格」に対して関心を示し、そしてそれを太宰の代表作として位置づけることが確認できた。

(2) 「人間失格」のネガティブな側面に関する報道

「ポジティブ・ネガティブ・中立」なレベルで調査を行った結果、表2の示すとおり、両紙がともに「人間失格」に関する「ネガティブな報道」をしたことはしたが、「ポジティブな報道」に比べ、ずっと少ないことがわかった。つまり、内容から見れば暗く、一部の読者にネガティブな作品と受けとめられる「人間失格」であり、そして世の中の流通するイメージも暗いのが多い「人間失格」であるが、しかしそうした側面があまり語られず、稀薄に印象付けられてしまう一方で、「人間失格」に関するポジティブな言説が、それぞれ60.0%と58.3%であり、両紙により前面に出されており、強調されていることである。

¹ 政治報道分野研究において、とある政治意見への賛成や批判をよく「ポジティブ・ネガティブ・中立な報道」で分類することがあるが、ここでいう「ポジティブ・ネガティブ・中立な報道」は若干違う。ここでは、「人間失格」の内容が消極的・悲観的であることへの言及や読者に消極的に・悲観的に受け止められる報道を「ネガティブな報道」、その逆は「ポジティブな報道」、どちらでもないものは「中立な報道」とする。

² 「人間失格」に関する記事であっても、数件の短い記事をまとめて伝える形式の情報短信に含まれているものは分析対象から除外した。

表2 「人間失格」をめぐる「朝日新聞」「読売新聞」の報道（ポジティブ・中立・ネガティブ）³

	ネガティブな報道	中立な報道	ポジティブな報道
「朝日新聞」	36	75	122
	16.5%	34.4%	60.0%
「読売新聞」	38	79	134
	16.5%	34.3%	58.3%

注：1本の記事に「人間失格」に関するネガティブな言説とポジティブな言説が両方に存在する場合があるため、合計は100%を超える。

(3) どの効果？

新聞メディアのこうしたフレーミングはどのような効果をもたらすだろうかという、新聞購読者は、特に軽読書化が進んできて以来、「人間失格」を読んだことのなく、頭の中に漠然と「人間失格」の暗いイメージを持つ購読者が、新聞メディアのこうした言説を読み、作品をポジティブに受け止める可能性が高いのではと思われる。

4. 「人間失格」に関する「朝日新聞」「読売新聞」報道の内容分析

一方、両紙の「人間失格」と関連のある記事を、それぞれすべてテキスト化し、テキストマイニングソフトを使って、「人間失格」と関連する語句を探索した。「人間失格」のどの側面がニュースバリューをもつものとして報道されていたのか、内容分析を行った。

表3 「人間失格」と関連する語句 朝日新聞

	抽出語	品詞	全体	共起	Jaccrd
1	太宰治	タグ	309 (0.084)	139 (0.513)	0.3152
2	斜陽	名詞	92 (0.025)	52 (0.192)	0.1672
3	太宰	人名	590 (0.161)	107 (0.395)	0.1419
4	作品	名詞	331 (0.090)	70 (0.258)	0.1316
5	作家	名詞	205 (0.056)	51 (0.188)	0.1200
6	代表	サ変名詞	60 (0.016)	34 (0.125)	0.1145
7	読む	動詞	252 (0.069)	53 (0.196)	0.1128
8	原稿	名詞	62 (0.017)	29 (0.107)	0.0954
9	時代	名詞	125 (0.034)	31 (0.114)	0.0849
10	草稿	名詞	28 (0.008)	22 (0.081)	0.0794
11	書く	動詞	173 (0.047)	32 (0.118)	0.0777
12	文庫	名詞	157 (0.043)	30 (0.111)	0.0754
13	小説	名詞	186 (0.051)	32 (0.118)	0.0753
14	三鷹	地名	135 (0.037)	27 (0.100)	0.0712
15	展示	サ変名詞	56 (0.015)	21 (0.077)	0.0686

*表中の「全体」は記事全体で出てくる回数と割合（カッコの中）、「共起」は「人間失格」の語と同時に出てくる回数と割合（カッコの中）を示している。Jaccrdはその関連の強さを示す係数。表4も同じ。

表4 「人間失格」と関連する語句 読売新聞

	抽出語	品詞	全体	共起	Jaccrd
1	太宰治	タグ	318 (0.082)	174 (0.608)	0.4047
2	斜陽	名詞	96 (0.025)	59 (0.206)	0.1827
3	太宰	人名	517 (0.134)	107 (0.374)	0.1537
4	作品	名詞	338 (0.087)	70 (0.245)	0.1264
5	読む	動詞	296 (0.076)	60 (0.210)	0.1149
6	作家	名詞	301 (0.078)	54 (0.189)	0.1013

³ もちろん、こうしたフレーミングは研究者の主観が混じっているが、「人間失格」に関する言説がほとんど断片的に出てきたため、大方の傾向が見られると思われる。

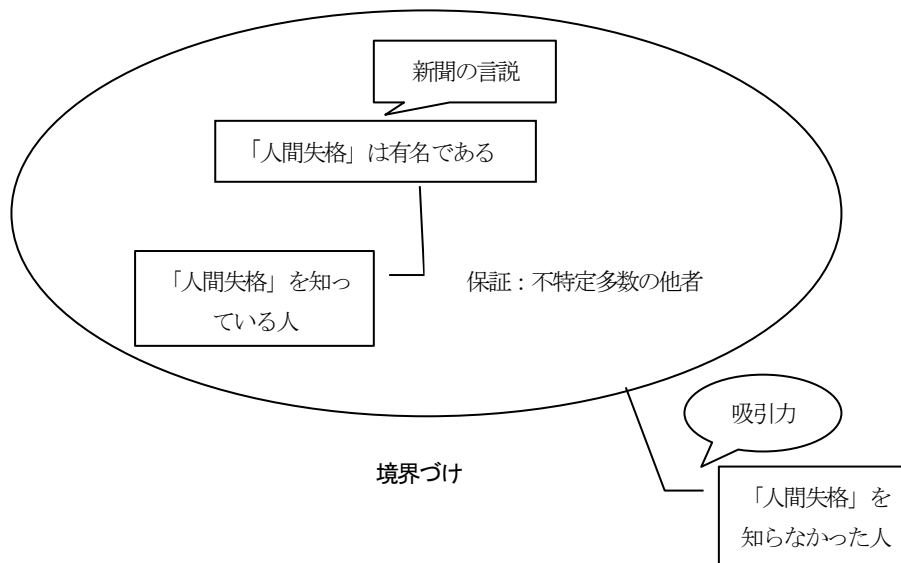
7	小説	名詞	264 (0.068)	48 (0.168)	0.0956
8	文庫	名詞	131 (0.034)	36 (0.126)	0.0945
9	代表	サ変名詞	66 (0.017)	28 (0.098)	0.0864
10	文学	名詞	332 (0.086)	48 (0.168)	0.0842
11	名作	名詞	64 (0.017)	27 (0.094)	0.0836
12	知る	動詞	119 (0.031)	30 (0.105)	0.0800
13	主人公	名詞	85 (0.022)	26 (0.091)	0.0754
14	漱石	人名	67 (0.017)	24 (0.084)	0.0729
15	人間	名詞	159 (0.041)	30 (0.105)	0.0723

(1) 「作家」太宰治の「代表」作、日本「文学」の「名作」としての「人間失格」

共通点として、まず作者太宰治とその作品「人間失格」の強い関連性が、「朝日新聞」と「読売新聞」から、ともに垣間見られる。また、表3と表4から次のことも予測される。つまり、「人間失格」は、「斜陽」と同じように、「作家」太宰治の「代表的な作品」として描かれている。それは表2で、すでに明らかになっていた。「太宰治」の「代表」作だけでなく、表4からわかるように、「読売新聞」では、「人間失格」は日本「文学」の「名作」としても語られている。

「人間失格」を太宰治の「代表作」、日本「文学」の「名作」と位置づける言説は、どのような意味を持つのだろうか。石田（1998）によれば、このような言説は、＜有名性＞表現のひとつ——「境界性（ジャンル）を限定した＜有名性＞の表現」である。筆者は石田の「有名性を中心とする境界づけ」の図を参照し、図1を作ってみた。

図1 有名性を中心とする境界づけ——「人間失格」の場合



つまり、まず、新聞メディアのこうした言説は、自らの知識から「人間失格」について言及しているだけではなく、その知識を不特定の他者が共有していることを前提としているのである。その意味で、「人間失格」を「有名」と表現することは、その場には存在しない不特定（多数）の他者をその場に顕現させることである。その一方で、「人間失格」を知らなかった人は、「有名」とされる「人間失格」を中心とするある種の境界づけに巻き込まれる。新聞の「人間失格」をめぐるこのような＜有名性＞表現は、「人間失格」を知らなかった者のこの境界の外部から内部への移動という運動を引き起こすことがある。このように、わりとインパクトのある「代表作」や「名作」といった＜有名性＞の表現により、新聞購読者は、「人間失格」に対してある程度の注目を払うこととなるだろう。

(2) 「漱石」の「こころ」と肩を並べる新潮「文庫」のロングセラーとしての「人間失格」

戦後長い間、「人間失格」は各文庫での売れ行きが好調であって来た。特に新潮文庫の中で累計刊行部数が、ずっと一、二を争う存在である。「文庫」が両紙の「人間失格」関連語句として、ともに上位15位に入っていることが示唆するのは、上

述の「人間失格」のそうした側面が、ニュースバリューの持つものとしてしばしば報じられていることである。それにより、ロングセラーとしての「人間失格」像が浮かび上がってきた。また表4からわかることは、「読売新聞」では、「漱石」も「人間失格」と関連する語句の上位15位に入っていることである。つまり、「新潮文庫では『人間失格』は五百万部を超え、小差ながら漱石の『こころ』を抑えて一位。毎年、新たな読者を開拓している。」⁴とあるように、「人間失格」のロングセラーとしての側面が報道される際に、常に同じロングセラーの「漱石」の「こころ」と一緒に論じられる図式が、「読売新聞」では多数用いられている。それにより、文豪・国民作家夏目「漱石」の「こころ」と肩を並べる太宰治の「人間失格」のイメージが強く読者の頭の中に植え付けるだろう。

(3) 同感を覚えたり、生きる希望さえ見出したりする若者をひきつける「人間失格」

「読む」という動詞が、表3と4にともに出現したことが示唆するのは、両紙がともに「人間失格」がどのように読まれているのかに重点を置いて報道したことである。「人間失格」がどんな人に、どのように読まれているのかと報じられていたのだろうか。それを探るために、筆者は、選出された両紙の記事を一件ずつ確認して、特に読者の声に注目したら、両紙に報道される「人間失格」のある読まれ方が非常に目立つことがわかった。つまり、同感を覚えたり、中でも生きる希望さえ見いだしたりする若者をひきつける「人間失格」の読まれ方である。

こうした「人間失格」の読まれ方を最も顕著に表すのは、第128回芥川賞受賞者大道珠貴の発言である。

「正義」とか理想的な家庭像とか、大多数が信じる“常識”に違和感を覚え、一人でいる子供だった。「口に出せば『間違い』と言われる」から、おのずと無口な子供になっていった。親に言われて進んだ高校では「劣等生」。教師の言葉を単に「音」として聞き、「常に息苦しさを感じながら生きてきました」。

言葉にできない内面に突破口が開けたのは十九歳の時。太宰治「人間失格」との出会いだった。「人間の悲しみ、滑稽(こっけい)さを察知する人がここにいる。はっとしました」⁵。

総じていえば、上述のような報道は、日頃文学にそれほど関心のない多くの人びとに、太宰治という作家の書いた小説がたくさんの人に読まれて評価されている＝＜有名性＞らしい程度の知識を持ってもらうチャンスにはなっているだろうと思われる。中でも、新聞メディアの語った「人間失格」のプラスイメージに魅了され、実際に本を手取る人さえ出てくるかもしれないと推測される。

5. おわりに——「人間失格」をめぐる「朝日新聞」「読売新聞」のフレーミングと言説の意味

それでは、なぜ「朝日新聞」も「読売新聞」も読者が「人間失格」をポジティブに受け止めるような記事を工夫するのだろうか。そしてなぜ、4で明らかになった「人間失格」像がニュースバリューの持つものとして報道されるのだろうか。文学作品と新聞は、ともに印刷された最初の規格化された商品として密接な関係にある。新聞が現れた初期から、文学作品を載せるメディアとしても機能したことがある。たとえば、「人間失格」と新潮文庫で累計発行部数の一、二を争う夏目漱石の「こころ」は、最初に、「朝日新聞」で「心先生の遺書」として連載されていたのである。太宰治の「パンドラの匣」も地方紙「河北新報」に1945年10月22日から1946年1月7日にかけて、64回にわたって掲載されていたのである。新聞の文学作品を載せる媒体としての機能が弱体化した後でも、新聞文化のひとつとして、「優れた本を読むということは、良い友を得て、魂にふれる対話をする事なんである」⁶といったような文章が新聞に載せられたことから、そして記事の見出しからもわかるように、新聞は、読書行為をずっと高く評価してきた。というより、それは、「国民文化」の一部と見なさしてもよからう。人間は読書をすべきである。若者の本離れが懸念される。それなら、どの本を読んだらいいのだろうか。もちろん有名な作家の作品や古典なら読むのがいい。前述の考察からわかるように、「人間失格」は日本文学の名作と位置づけられてきた。また、作者の太宰治も「39年の生涯(しょうがい)を駆(か)け抜けた文学界のスーパースター」⁷といった言説からわかるように、「人気作家」「現役大家」の一人と評価されている。そのため、一部の読者にネガティブな作品と受けとめられる「人間失格」であり、そして現実世の中の流通するイメージも暗いが多い「人間失格」にもかかわらず、そうした側面が、

⁴ 「読売新聞」1998年6月8日付記事「[没後50年・太宰治の世界] (上) 苦悩?演技?揺れる『読み』 (連載)」

⁵ 「読売新聞」2003年1月17日付記事「[顔] 第128回芥川賞に決まった 大道珠貴さん」

⁶ 「朝日新聞」1988年3月27日付記事「若者よ、もっと本を読み 坂本義和さん(わたしの言い分)」

新聞メディアではあまり語られず、きわめて稀薄に印象付けられてしまうわけである。ただ、上述の「人間失格」のネガティブな側面が、「読書文化」装置としての新聞メディアの機能を前景化させたのではと思われる。ここでマスメディア組織によるニュースの生産という行為が、社会システムのイデオロギー、すなわち社会全体の価値や信念の分布を反映し、集約し、それを突出させる作業であることが確認できよう。

参考文献

- 1) Burr, V. (1995) : *An Introduction to Social Constructionism* (『社会的構築主義への招待』, 田中一彦訳, 川島書店, 1997.)
- 2) 谷本奈穂(2013) : ミドルエイジ女性向け雑誌における身体の『老化』イメージ, 『マス・コミュニケーション』No. 83, pp. 5-29.
- 3) 浅岡隆裕(2012) : メディア表象の文化社会学——<昭和>イメージの生成と定着の研究, ハーベスト社
- 4) 佐伯順子(2012) : 明治<美人>論——メディアは女性をどう変えたか, NK出版
- 5) 石田あゆ(2006) : ミッチー・ブーム, 文芸春秋
- 6) 宇佐美毅(2015) : 文学とマスメディア, 『日本近代文学』No. 92
- 7) 大石祐(2005) : ジャーナリズムとメディア言説, 勁草書房
- 8) 石田佐恵子(1998) : 有名性という文化装置, 勁草書房
- 9) 川竹和夫(1988) : ニッポンのイメージ——マスメディアの効果, 日本放送出版協会
- 10) 東郷克美編(1995) : 太宰治事典, 学燈社
- 11) 長谷川公一 (ほか) (2007=2012) : 社会学, 有斐閣
- 12) 高井昌史・谷本奈穂(2009) : メディア文化を社会学する, 世界思想社
- 13) 萩原滋(2007) : フレーム概念の再検討 : 実証的研究の立場から, 『三田社会学』No. 27.
- 14) 李光鎬(2006) : 二つの『北朝鮮』 : 日本と韓国のTVニュースにおける北朝鮮報道の内容分析, 『メディア・コミュニケーション研究紀要』No. 56
- 15) 相田敏彦(2001) : 構築主義メディア理論への招待——カルチュラル・スタディーズの視角から, 八千代出版
- 16) 川崎賢子(2005) : 太宰治の情死報道——ブラング文庫資料とその周辺から, 『叢書 現代のメディアとジャーナリズム 第五巻』ミネルヴァ書房
- 17) 松本和也(2009) : 昭和十年前後の太宰治<青年>・メディア・テキスト, ひつじ書房
- 18) 笹尾佳代(2012) : 結ばれる一葉——メディアと作家イメージ, 双文出版社

⁷ 「朝日新聞」2009年2月17日付記事「(窓・論説委員室から)「百歳」の人気作家